

みんなで人権^{じんけん}を考える「つなぐ」 TUNAGU II

そのだ ひさこ

「TUNAGU II」とは

人と人、心と心をつなぐ、世界とつなぐ—人権尊重のまちづくりの一環として、さまざまな人権問題について市民の皆さんと共に考えます。

いつの日か人がのびやかに
生きられるときが来たなら

令和4年6月、宗像市在住の作家、森崎和江さんが95歳で亡くなられた。私の人生でかけがえのない魂の恩人だった。彼女は女性問題、炭鉱労働者の問題、韓国・朝鮮の問題など生涯をかけて表現しつづけた詩人・作家であり、その執筆は多岐にわたり、膨大である。主に明治期から、海外に売られていった女性たちをテーマにした「からゆきさん」（昭和51年朝日新聞社出版）はベストセラーとなった。

20代のころ、「アジア女性史交流会」という学習会が偶然、私が在学していた大学構内の一室であっていた。そこには森崎和江さん、石牟礼道子さんなど、当時の日本列島を「言葉」で揺るがしていたような九州の女性たちが一堂に会され、輝いていた。そのにおやかさ、そのパワーは深い衝撃だった。

森崎さんの膨大な著作の中で、私が数十年こたわりつづけてきたのは、女性問題の中でも「書かれざる歴史」と言われ、表現しにくい「からゆきさん」をはじめとする女・性（セクシュアリティ）に関する表現である。

女性の被差別の実態の記録、叙述はさまざまに存在しているが、森崎さんのその著作は被差別の実態の羅列ではなく、切りこみ口も、切りこみ方も全然違ったものだった。意識に先行して人類に所属している「性の自然性」という

ことの提起や、あるいは太古の「人ひとりなるはよからず」（聖書）のように人間にとって「性」とは何かという男女の關係の本質的な問いや深め方がある。例えば産んだ女と産めない女の書簡のやり取りでできている「第三の性」（平成4年河出書房）には、産まない（産めない）女の悲しみを身に受けつつ、それに向き合う中で人にとって「性」とは何かという深い掘り下げがなされている。

「からゆきさん」では何人もの事例が取り上げられている。元「からゆき」の子を養女にして老後を過ごしている女性、1900年代、朝鮮鉄道の敷設権を日本が握って行く時、そこで働く工夫（こうふ）たちの行く先々に移されていった娼楼（しょうろう）で働いていた。一見、物静かな日常の中で、突如、養母の狂気と悲しみが噴き出す。「身を売ることは一代のことではない。深い罪なのだ」という養女の呻吟（しんぎん）。「からゆきさん」の後がきには「もし、いつの日か人がのびやかに生きられる日が来たら、そのときわたしは、娼婦のさがをも、のびのびと育てよう、とたあいない夢をみつづ…」とある。

戦後、日本国憲法下でも遊郭はしばらく存在し、一夫一婦父権制社会が亡霊のように生きていた。父性が欠落した時空で育った私もまた、自らの貧相な被差別を一枚ずつ脱ぎながら、伸びやかにこそ生きていたいと思う。

■ 教育政策課

人権尊重のまちづくりのために

今、日本でも性の多様化社会を迎えています。本市でもLGBT問題を理解するため市民懇談会も実施されました。一方、性的少数者に対し、ある首相秘書官が「見るのも嫌だ、隣に住んでいたら嫌だ」と差別発言したことは、欧米諸国でもニュースになりました。首相秘書官は更迭されましたが、これらの発言を機に、性的少数者の理解を促進するための法（LGBT法）やさまざまな差別をなくす包括的な差別禁止法の制定について国会でも話題になっています。

筑紫野市は人権尊重のまちづくりを推進しています。どのような法ができるのか見守っていききたいですね。

筑紫野市人権尊重の
まちづくりスローガン

自分が人からされたり、
言われたりして、
いやなことは、
自分は人にしない、言わない

平成29年度筑紫野市総合教育会議にて、子どもにも大人にも理解でき、実践に移せるスローガンとして決議されました。